V晚年の思索

16竹本信弘宛書簡（一九八四年二～六月）

大仏　空

一

釈尊（シャカムニ）シッダルタが宗教に入ったのは何故か？彼は釈迦族の指導者の子として生まれたと伝えられます。キワめて弱小な氏（種）族ですが（インド・スキータイ（？）だと云われます）、せいぜい村長さんの倅位だった……と思いますが……彼が宮殿（キューデン）（お屋敷くらい）を出た時、病人や死者を見て、人生の無常を感じて出家したと経典には書かれて居りますが、愚僧は、それだけではないと思って居ります。彼の生れる約一〇〇年ほど前、ペルシアに生まれたクロス［＝キュロス］二世[注1]は、空前の大帝国を建てました。ギリシャ、シチリアからエジプト、ドナウ河畔から、東はインダス川までを統一しました。クロス二世はゾロアスターの教えを全世界に拡めようとしたのです。そして全世界に使者を派遣して親書を持たせました（この親書を福音と名づけ、今日のキリスト教で福音書と云うのはこれによるのです）。その福音には、「全世界の人々は斗いを止め、兄弟として平和に生きねばならぬ」と書かれていました（いまもペルセポリスの遺跡には刻まれているそうです）。

勿論インドにも使者は来ました。当時インドは小群雄国の分裂状態でした。隣りの強大な帝国から安保条約の締結を求めて来られた小国が首肯する筈がありません。むしろ、覇権争いが激しくなって、大統一の方に向うのです。釈迦族の様な弱小民族は……

シッダルタは生きている裡に一族が皆殺しになるのを見たのです。彼は出家前にその運命を見透していた……と思ってよいのです。人間は何故争わなければ生きて行けないのか。なぜ、幸福を求めて不幸になるのか？

これが彼の出家の理由だったと愚僧は思います。

彼が精神的苦斗の結果出した結論は、一切を棄てることでした。生きることも死ぬことも、欲望も、無欲であることも、いわんや道徳や法律などはもはや問題になりません。

これはキワめて過激です。最近、すべてが風俗化してしまい、過激なヌード！だとか、過激なラーメンなど、過激とか過激派という意味が　なんのこっちゃ！

シッダルタはこの過激なイデオロギーを誰にも話すまい、話したところで誰も理解しないだろうし、生（ナマ）なかに理解されると危険だと思ったようです。

神話なのですがここで天の神々が降りて来て、シッダルタに諸人に法を説くよう！勧めたと経典には書かれています。一旦、布教を開始するとアッという間に大教団になった様です。大部分は他の新興宗教（つまりバラモンではない）の集団加入だった様で、特に拝火教（ゾロアスター教？）の集団加入があったと書かれています。さらに、亡ろぼされた釈迦族で生き残った者は、一種のアジールとして仏教々団に入ることがあった様です。

シッダルタは生まれて7日目に実母が死にその妹プラジャパティーが育だてたと云われ、その育ての親が入れて呉れと云って来たのです。シッダルタは断ったのですが、育ての親の頼みで、遂に加入を認めることになり、シッダルタは「女性が加入する様になったので仏教の終りは早まった」と云ったと書かれています。

シッダルタの従兄にデーヴァダッタという者が居ました。彼も釈迦族の生き残りだった訳で、彼は一族滅亡の怨念が棄て切れず、この教団を斗争に起ち上がらせ様としたようです。

そこでシッダルタに五項目の要求を出して、それが容れられるか、シッダルタが引退して指導権を渡すか……だと云ったと云われます。ここでデーヴァは破門除名されるのですが、なかにはデーヴァに従って別派を組織した人々も居る様です。

デーヴァの出した要求は、①肉食をしないこと、②屋根のある処では寝ないこと、③金銭を手にしないこと、など過激なことだったと云われます。古代において（現代でも）、通貨はその国の帝王の像が刻まれ、国家権力の集約ですから、それを意味したのかも知れません。

しかしなんと云っても国家権力と斗うための教団にし様としたことは確かでしょう（勿論思想的にでしょう）。

シッダルタにしてみれば怨念など棄てねばならぬ第一のものでしたから、デーヴァを破門せざるを得なかったのでしょう。シッダルタがいかに怨念は持たない、と云っても、社会通念や法律を基本的に認めない集団が居ることはキワめて危険な訳です。下手をすれば全員処刑が日常的に行われていた時代です。

シッダルタの理念は二〇世紀に入ってガンヂー Gandhi に受けつがれたと思います。ガンヂーはトルストイを持ち出しますが本筋はシッダルタでしょう。叩かれても殴られても頭から血を出しながら無抵抗で座り込みを続け、ついに独立を克ち把ったインドの独立斗争は、人類史の驚異だと思って居ります。

ガンヂーはその斗いの戦術をサチャーグラハ(Satyā-graha)と呼びました。サチャーは仏教では聖諦と音訳します。真実の意味とされますが、存在、実際、現実の方が近い意味で、グラハは把のことで、英語のグリップ、独語のグリフです。現実のもっとも有効な、しかも非暴力の斗い方を意味しました。

非暴力は ahiṃsā（アヒムサー）で、仏教では不殺生と訳しますが、a は否定語、hiṃs は害する、殺すの意味です。a ＋ hiṃsā で非暴力と訳されています。

愚僧は昔、玄関に「公務員と犬入るべからず」と「非暴力・無差別・不所有」の二枚のスローガンを掲げて置いたことがあります。

これは、仏教とガンヂーの両方に共通な綱領だと思って居ります。

愚僧のことを何人かのレポーターが本に書いて呉れてるのに、「公務員と犬」の方はよく書かれるのに「非暴力・無差別・不所有」の方は誰も書いて呉れません。

一切のものを棄てて生きるためには、世の中と呼ばれる社会の現実が、この三原則に造り変えられないと生きて行けませんものね。私は世の中がこうあって欲しいし、そうするために一寸でも努力しなければ……とは思っています。

Nam Amida!

二

よく仏教者（〇〇禅師とか××上人など）はおのれを棄て切ったとき、おのれが確立する！と云ってると思うのです（？）……（若し誰も云っていませんでしたら、ここで愚僧が云いましょう）

まあ、偉い人が云っても云わなくても仏教の典型的発想パターンであることはまちがいありませんから、愚僧が云ってもあまり変りありません。これは一つの結論で、そこまでたどるプロセスを省略して云う訳で、プロセスを説明しなければならないような奴は説明したって分らないと云います。

古い云い方だと一心三観と云いますが、弁証法的な実相論と云います。実相とは現実の様相の意味と云ってよいです。法相に対する言葉で、法相の場合の法（ダルマ）は殆んど真理の意味で抽象的な真理のことを指してると思ってよいのです。

法相宗という宗派（学派）がありますが、その派に代表される考え方は法相唯識と云います。世界は意識によってのみ成立するという考え方で、意識とはなにかを詳しく研究して深層心理学を展開して居ります。

知覚＝感覚器官による＝が完全に機能しない純粋な意識（精神）というもの（たとえば大脳だけを切り取って試験管飼育した場合なども想定して居ります）が本当にあり得るか？……それは無い……従って世界というものは感覚の上に意識があってそこに成立する幻想でしかない！というのが唯識で vijnāna と云います。これは vi√jnana で、vi は意味を強める接頭語、語尾の na は名詞化した語尾変化で語根は jnā です。jnā ズナーはギリシア語の gnō に当ります。つまりグノーシスとビズナーナは同じ言葉のギリシャ語とサンスクリット語の発音の違いでしかありません。これを土台にして云われる真理ですから、キワめて抽象的というより観念的です。

それに対しての実相ですから、現実の様相（むしろエクジスタンスに近い）なのです。勿論、仏教ですからあらゆる存在は、生成と消滅が絶えず同時進行しているその相（アリサマ・すがた）のことで、その実相を弁証法的に把らえるのです。

貴君の云うとおり、この弁証法が独特なもので、ヘーゲルのそれの様に定・反・綜と進まずに定反中と進むことを書きましたが、先述のプロセスを省略して結論だけしか云わないというのと似ています（同じ根拠から出ていますから）。

中また（把）ということ、それは断絶というような方法（？）をとる……と云いますか選択、克服と云うべきか？……

アウフヘーベン（上に揚げる）の様に――定や反の次元からアウフ（上）の次元にヘーベン（揚げる）というようなことはないと云うべきなのか？……

止揚とか揚棄というのが把揚とか揚把（止めたり棄てることがない）という訳で、低い次元のままで高い次元に揚ったのと同じと見ると云うのか。

私はよく云うのですが、「これは新聞である」というテーゼに対して「否＝新聞ではない」ただの古紙だという反テーゼがあり止揚されて、定反のいずれも止めて新聞でもない古紙でもない古新聞紙という綜定是（ジンテーゼ）になるとはしません。

たとえ五年前の新聞であろうと汚れて読めなかろうと新聞は新聞であり、イササかも紙でなく断乎として、新聞以外のものは認めない……ということになるのではないか……と思います。

たとえば親鸞の悪人正機について云いますと、「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや、しかるを世の人常にいはく悪人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この条、一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり」。この場合、親鸞は別のところで「善悪のふたつ、総じてもて存知せざるなり」とも云ってる訳で、結局世の中には善悪の規準などはない！と云ってるのです。それなのに悪人こそ救われる……というのはどういうことか？

これは小さな善とか悪とかでなくそれより次元の高い、歴史的社会的なマクロの目で見よう、そして……

などというのではなく、俺（親鸞）は悪以外のなにものでもない、どう考えても、罪悪的存在以外のなにものでもない。矛盾解決のために努力すると、今度はそのために二つの矛盾を抱き込んでしまう。

だからもう矛盾解決などしないで矛盾そのものになり切って行こう、つまり善人になるための努力でなく悪人になり切って生きて行こう！というような弁証法なのです。

悪になり切る時、必然的に善は、その中に包摂されてしまいますが、いささかでも善になろうなどと思ったらダメで、完全に悪になり切り、一寸でも善の要素を含まず善の要素を完全に排除することが肝心という訳です。

――（善を棄て切ることで善を完全に克服する）――

要するに綜合しないで一方を切り棄てるという、排除することで包摂してしまう。悪になり切ることで善はとじ込めるというか、克服する……という形の弁証法なのです。いささかでも善を認めると、この弁証法は成り立ちません。その排除することが包摂であるのが相即ということなのです。

相即についてなんと云えばよいのか。この言葉はインドにはなく、中国で智顗が使った用語だと思います。

相対的な、相互補完的なものを、絶対の立場で把えなおすこととでも云えばよいのでしょうか。死において生を把え悪にこそ善を見るというか、愚僧はこの相即の出て来るもとに華厳思想があったと見ています。短い手紙で華厳思想を説明できるとも思えませんが、一つだけ云いますと「一即一切・一切即一」という言葉があります。華厳経には今日で云う整数論が展開されて居ります。

〃一〃つまり整数の〃一〃とはなにか？　一とはそれと完全に同じ他の一があるということを前提してのみ成り立ちます。他の一を認めることは他の他の一を認めつまり無数を認めることになります。

一は無数を認めることにおいて成立する。一＝∞になります。仏教ではあ

らゆる存在は原子（パラマーナ）という単位が集合して成り立つと考えることになって居りますから、パラマーナ（原子）という単位の一を認めることは、一つ一つの原子の中に無数の原子があること、つまり一つの原子の中に宇宙があるというのです。このような考え方を華厳思想と云います。

本当のことを云いますとこれほど単純でもない様ですが、まあそう思って下さい。

またパラマーナを漢訳華厳経では原子と訳し、今日の物理学用語だと思われてるのは本当は仏教用語なのですが、param ＋ anu で、parama は極限、anu は粒・粒子の意味で、むしろ今日の素粒子やクォークに当ります。中国では介尓（けに）とも云いました。つまり介＝限界、尓＝それ、有と無との接点という程の意味だと思います。

この介尓（ケニ）に宇宙は入っているというのです。これを人間的に［云い］直すと、どの様なつまらない存在にもそこには真理がある。しかもその真理は大宇宙の真理と同じものというより、一つのものだということになります。

一つの存在の中には生もあれば死もあり、善もあれば悪もある訳で、定もあれば反も同時に入っていると云います。ですから存在そのものはすでに弁証法的に成立してる。だから綜合するのではなく、純粋化することでむしろ綜合の意味を持ち得ると考えるのです。

私の云う定、反、中（把）のことを、世阿弥は序破急と云い、利久（休）は守破離と云い、花道では真行草と云います。

いずれも、ヘーゲルなら綜合になるところで、急とか離とか草とかいって綜合の反対の意味のことを云います。また乱（みだれ）とすら云います。乱れ切った処に真の秩序がある、狂い切った人こそ聖人だとも云います。身を捨ててこそ浮かぶ瀬があるとも云います。

この弁証法を確立した人は中国の智顗 Zhiyi（チイ）日本ではチギと読んでいます。また天台山という処にいたので天台大師とも云います。

日本には鑑真がもたらし最澄が学派を開き、円仁……→恵心僧都源信……→法然と伝わり親鸞となる訳です。日蓮も道元も皆この中にいる訳です。

明治になって島地大等（東大講師）が再発掘して、多くの著書を発表、北一輝・田中智学や宮沢賢治が強く影響を受けました。なかでも賢治は大等師から直接、話を聞いて居ります。

藤原俊成・定家、観阿弥・世阿弥、紹鴎[*2]・利久、宗祇・貞徳[*3]・芭蕉、池ノ坊・立阿弥[*4]ら、つまり日本文化の担い手のすべてはこの弁証法的実相論の実践者達です。歌の道では実相感入・実相観入とか云い、それは極意です。

その境地は〝さび〟そしてその対語として〝わび〟という表現になります。

〝さび〟はスサビの略ですさまじいこと、スサムはススムとも同語源ですから進行→断行の意味になります。〝わび〟は詫びるで自己告発→懺悔＝徹底した自己批判を意味し、さびとわびは両面があってはじめて成り立つ。相即的に云えば〝さび〟の中に〝わび〟は当然入っているということになりますか。

近代的自我というものはキリスト教的自我と云うべきだし、さらに云えば、アングロ文化だと云ってよいでしょう。それについてはテキストの中でJ・ロック以来のことを大雑把に、そして労働価値説との関連で書いて置きました。[*5] ロック以前で云えば宗教改革とくにJ・カルヴァンでしょう。さらに古きを探ねるとアウグスティヌスに至ると思います。

彼[*6]（アウグスティヌス）は若き日にマニ教徒だったことは有名で、彼がマニ教からキリスト教に改宗したことこそ、まさにヨーロッパの自己中心文化の出発だと愚僧は思って居ります。

つまりマニ教ではこの世はすべて夢・幻だ、錯覚だとするので、彼の魂は安心が得られず、キリスト教に入信することによって霊魂不滅を確立し精神の安定を得ました。この辺のことはもっと詳しく書きたいのですが、とも角、労働価値説の遠い先祖を探ねるとアウグスティヌスの霊魂不滅説だというこ

とになります。

仏教では（マニ教も仏教の一派として）人間は人間という集合物でしかなく、死んでしまえば灰ですから、或いは夢・幻と云ってもよいでしょう……となると個人の責任とはなにか？に関する考え方がキリスト教とは相当、違わざるを得ません。従って仏教文化の中では労働価値説は成り立たなかったし、それはマルクス主ギも生まなかった訳です。

アウグスティヌス以後キリスト教は確実に一神教の道を歩き出すことになります。それまでのキリスト教は必ずしも一神教ではなかった！というのが、愚僧の考えです。

マルクスもヒットラーも、一神教文化の中だからこそ生まれたものだと思われます。一神教は価値観の一元化を生みます。

自己の存在の確実性、物質の固定的実在観などは、キリスト教の一神教的文化土壌によって生まれたと思います。そしてそれが、近代というものの土台になりました。

弁証法的実相の世界では、古池や蛙とび込む水の音の中に芭蕉は居りませんが、ポチャンという水の音そのものが芭蕉だという世界が生まれます。棄てて棄てて完全に棄て切ったところに自己が確立する。これが弁証法的実相の自己だ、さびの境地だということになります。

量から質への転換ということが云われます。これは、物質の固定的実在感や自己の存在の確実性から来る錯覚に過ぎないと思うのです。

この量から質への転換はキリスト教では復活（蘇カ）、この世の終末として語られて来ました。化学では昇華、生物学では変身（メタモルフォーゼ）でしょう。革命と云ってもよいのです。

たとえば水が気化（水蒸気になる）とか氷になることで説明されます。しかしそれは人間の錯覚に過ぎません。というよりその様な錯覚をすることが人間の限界なのだと思います。固体と見ようが気体と見ようが H_2O に変りがなく、H_2O にはじめから固体に見えたり液体に見えたりする性格はそなわっているのです。人間でない目、たとえば熱や光などから見れば水の分子間の動きがすこし違うだけのことです。それを固体として見ることは、気体または液体としてのあり方を排除することで固体（氷）としての見方を確立してる訳で、たとえば9と6と3の合計は（3＋2＋1）3ということになり、9と6と3に共通の因数3を排除することによって括弧を成立させるのと同じです。括弧は組織であり、規律、道徳法律で、社会通念というものです。組織（常識・社会通念）を確立するためには邪マ者を排除することで組織は成り立ちます。

私達の理性と呼ばれるものは、理性にとっての邪マ者、たとえば水を見るとき氷である性質や水蒸気である性質を排除することで水と見る知識が成立します。

私達が水を見る時でも同時に氷であったり水蒸気であったりする状態はあるのです。ただ我々には認識することができないだけです。

そして、その分らないということが人間を形成しているし、人間である限り水を氷と見ることはあやまりだというだけのことです（この変ること――これがあやまり錯覚――を相転移と云います）。

人間の理性（リセイ）というものは多くのものを切り棄て排除することによってのみ成立してると思います。それは丁度、因数分解の様なものです。括弧が理性とよばれるものになります。あるいは道徳とか法律とか云ってもよいでしょう。

従って権力は必ず悪者を排除することによってのみ成立します。括弧の外のものを中に入れれば括弧つまり秩序は崩壊してしまいます。

しかも本質的に排除される因子も排除する側と同じものでなければ排除する必要は生じません。

青い芝ではニワトリ理論と呼ばれるものがあります。十羽の鶏を放し飼にすると一羽が他の九羽からつつき出されて餌も満足に食べられません。そこでその一羽をつぶすと、また一羽が他の八羽からつつき出されるのです。

つまり、つつかれる一羽につつかれる原因があるのではなく、つつく方が

その安寧と秩序のためつつき出すのです。私達の理性、さらにその基礎になっている感覚も、この排除の因子（数力）分解の構造で成り立っているのです。

理性（リセイ）というのは反訳（ホンヤク）語で仏教で云う理性（リショー）は本質とか本性という意味です。リセイにやや近いものは仏教語では智恵＝般若でしょう。パーリ語で panna パンニャで、サンスクリット語では prajnā です。つまり pra（前）＋jnā、プラズナーです。

これは一種の断念を含んでいると云うべきか、覚悟に近いのです。覚悟は budh（動詞）の過去分詞で buddha で覚悟した（者）となります。本来は開らく（目が）で英語の bud（蕾）（蕾・芽が開らく）と語源は同じです。名詞では bodhi（菩提）となります。

現代社会の構造は、この覚悟（つまり断念を含んだ）がなく、排除の論理でのみなり立っていると見ます。つまり懺悔がないのです。

抽象的労働と云う時、切り棄てられた具体的労働は抹殺され弾圧されることになります。

青い芝の斗いは排除された者の奪権斗争です。社会そのものに自己告発を求める運動です。

私達が自己を認識する時、自己を形成するのに邪マになるものは排除して自己認識しているのです。あくまでも錯覚にしか過ぎません。しかもその上に立って、仏陀シッダルタの最後の言葉は「自らに頼れ、他に頼ることなかれ」だったのです。勿論この頼るべき自己には厳しい懺悔がその内容に入ってる訳です。

自己が絶えずアンチ自己と結びついてるのが、仏教的に確立されるべき自己なのでしょう。そしてアンチ自己を克服して自己を確立して行く訳でしょう。けど克服は棄てたり止めるのと違うのでしょう。他において自己を見る、とくに敬語とか助数詞にその特徴が表現されます。対手を〝さん〟と呼ぶか〝君〟と呼ぶかで逆に自己を規定するもので、これはキワめて厳密だと云ってよいでしょう。ヨーロッパ語はその点、曖昧だと思います。

つまり対手を〝さん〟と呼ぶか〝君〟と呼ぶか、先生と呼ぶかは対手を格つけすることではなく、おのれを規定することです。それも対手によっておのれを規定するのであって、これは相当キビしい規定なのです。竹本さんが、ワザワザ先生と呼ばせて下さいなどとコトわるのは、そのキビしさを表わして居ります。

助数詞は、一冊とか一枚とか一台、一匹、一頭などと云う時の冊とか枚ですが、これは単位とは違いますし、内容も意味しますし、そのものに対するおのれのあり方を規定してるのです。自然に対する（時間・空間や熱量・質・重量）自己規定をする言葉でしょう。日本人の自然感の基礎をなしているのです。

そこに自己は入っていませんにも拘らず、それによって自己を規定して行くのが、日本の文化の伝統です。もっとも明瞭なのはノーやヤー、No と Yes の使い方です。ヨーロッパ語では自己中心的にノーとヤーを使いますが、日本語では対手中心に〝はい〟と〝いいえ〟を使います。

これが仏教から来たのだとは云い切れないと思うのですが、日本の仏教を形成して来た決定的要素だったことはマ違いありません。鶏・卵の関係でしょう。

芭蕉はポチャンという水の音でおのれを規定しました。

自我が残ってる裡は、自己は規定し得ないと日本人は考えて居る様です。これが日本で絶対他力の宗教が成立した所以です。こうなって来ると、絶対他力の浄土教はもはや仏教ですらない！と云ってよいのだと思います。

ケインズがマーシャルを否定したとしても、所詮はいずれも近代的自我の上に成り立っています。それはマルクスもヒットラーも同じです。

労働という言葉を考える時、日本には労働がなく、奉公があるだけだということになります。それでよい！とは思えませんが、労働があてはまらないのも事実です。労働は絶えず労働でないものを排除することで成り立って居りますし、日本には奉公をはじめ労働でないものが多過ぎますし、それらは決して、労働と妥協しないでしょう。

違った概念をつくり上げなければならないのではないか、などと考えている次第です。

Nam Amida!

三

仏教では〝愛〟というものに、さして価値高いものとして認めてない！というところでしょうか。

人類愛（博愛）にしても親子の愛にしても、男女の愛にしても結局は欲望の一種にしか過ぎず、エゴの表われと見るのが基本です。

だからダメか？と云えば、いくらダメ！と云ってもそれなしに生きられないのが人間ですから、この自己完結性のないことを確実に意識し体得することから出発しなければならない……と考える訳で、これを悲＝カルナ karuṇā と云い、カルナは英語の cry に当ります。それは友＝ maitrī（これは英語の mate に当り、友というより連れ、仲間・契約の方に近い）がついて maitrī-karuṇā 慈悲と云います。

つまり悲または慈悲は、終局において愛は成立しないにも拘わらず愛さずにはいられない、もしくは愛が成立しないことを覚悟の上、愛する。このことを「悲」または「慈悲」というのです。

愛というものは所詮は欲望・錯覚で、云えば煩悩の一種ですが、仏教では、それを神格化して愛染明王 Rāga-rāja ラーガ・ラージャとしています。rāga は染めるの意味で、ルージュやレッドと語源的に同じでしょう。つまり「赤」も意味します。赤は劇しいという意味も持つし、むさぼり「貪」になるのでしょう。その貪りを、むしろよい方に転換させる神様なのだと理解しています。

これは明王という位で、兵隊の位で云えば下士官くらいなのでしょう。菩薩というのは高級将校です。

菩提薩埵 bodhi-sattva、bodhi は budh ＝決意する（動詞）の名詞形で決意、sattva はあるもの＝生きる者で、菩薩（菩提薩埵の略）は決意して生きる者ですから、世のため人のためにおのれを棄てて生きる人の意味ですが、たとえ限りなく仏に近いとしても、人を助け様という欲望がある裡は、最高位の仏（如来）からは一段と低い訳です。

しかし菩薩こそ大乗教の代表で、現在、東京でガンダーラ美術展が開かれていますが、[*7] そこにならべられた菩薩像は宗教家の姿ではなく、武士階級（クシャトリヤ）の姿で表わされています。

上座部が宗教家なのに［対して］素人の信仰者が菩薩なのです。いくつかの経典にそのことは書かれています。

本来、仏教は世捨人・隠遁者の集団（サンガ＝ saṃgha 僧伽）として発達したのでしょうが、ガンダーラに入って大乗教に変化しました。

仏像というものがガンダーラに二世紀頃になってできて来るのです。これは明瞭にギリシャ人職人の作ったものでした。

それまで［仏］像というものは決してなかったのです。多分意識的に作るべきではない、という考えがあったのだろうと云われています。

ガンダーラが歴史上登場するのはペルシャ領として登場します。BC五五一年に即位したクロス二世はインド（ガンダーラ）からエジプト、ギリシャまでを統一、つまり古代世界の中国を除いた全部を統一した訳で（本当は二代後のダリウス［＝ダレイオス］一世[*8]の時ですが）、それから以後の理想的皇帝のモデル、つまり転法輪聖王＝ダルマチャクラ・バルティンラージャ、略して転輪王になる訳で、同封しました、旧約聖書イザヤ書四五章をお読み下さい。

ここでクロスは、イスラエルの神によって人類の救い主、解放者として出現したことになっています。ユダヤ教という宗教が、ペルシアの宗教つまりゾロアスター教の一分派にしか過ぎないのだという、愚僧の大きな論拠の一つです。

受膏者クロスという肩書きが一節に出て来ますが、ヘブライ語の原典では、メシア・クロスとなってる訳で、メシアを受膏者と無理して訳したのです。[*9] というのは、メシアをギリシャ語に訳すとキリストとなりますから、メシア・クロスはクロス・キリストということになるので、受膏者という言葉を作ったのでしょう。

もっともイザヤ書はクロスの後、二〜三〇〇年も経ってからイザヤの名に仮託して書かれたものと思われて居りますが、このクロス（本当はダリウス）がガンダーラに入ったのが、ガンダーラが歴史上登場する初めなのです。

そしてその後、BC三二六年にアレキサンドロスが入って来ます。（よくアレキサンドロスの東征！ということが云われますが、それはヨーロッパ中心主義から来た偏見で、アレキサンドロスはアケメネス家の血を引いた人間で、分家から総領家に入って覇権を確立し、帝国内を巡幸しただけのことだという記録はイラン側にあります。）

彼（アレキサンドロス）の一世代前迄ペルシア帝国のマケドニア総督だったクロス（これは聖帝クロスと区別するため小クロスと呼ばれる）は本家に入って皇帝になろうとして、ギリシャ軍団を率いてメソポタミアに攻め込むのですが、肝心なクロスが戦死してしまい、ギリシャ兵達は命からがら、ギリシャ本土に逃げ返ります。その中に、クセノフォン（ソクラテスの弟子）が居て、その記録を残しています。

アレキサンドロスはその小クロスの血を引いている（？）と考えられ、小クロスのはたさなかった夢を実現しただけのことなのです。そうして、ペルシア領だった末端のガンダーラにアレキサンドリアを二つは建てたと云われ、そこにマケドニア人（ギリシャ人）を駐留させるのです。

かくしてギリシャ文字とギリシャ文化（アリストテレス的）はガンダーラを支配して居たのですが、BC一世紀頃になると中央アジアからサカ族（釈迦族）やクシャン（大月支）族[*10]が入って来て覇権は移りますが、ギリシャ文字と文化は受けつがれます。そしてその頃メナンドロス王の時ナーガセーナが来た[*11]のです（コピー参照）。

もち論それはまだ大乗教が成立していませんから、上座部（テーラヴァーダ）です。

おもしろいことに一世紀になるとグンダファル王の時、キリスト教徒トマスが布教に来て、グンダファル王はクリスチャンになったと「トマス福音書」（聖書外伝）には書かれています。[*12]これが真実だとすれば人類史上最初のキリスト信者の王、つまりキリスト教国ということになります。昭和の初めの頃までは荒唐無ケイな話だと思われていましたが、最近の発掘から、どうも本当らしいと思われる様になって来た様です。

そして二世紀に入ってクシャン族の覇権の時、つまりカニシカ王の時、大乗仏教が成立したとされます。カニシカ王のことについて中村元先生の『インド思想とギリシャ思想との交流』［春秋社、一九五九年］からコピーを写して同封しましたが、そこにある彼の肩書きで分る様に、種々の文化の折中・混合をカニシカは図（ハカ）った様です。

彼の立場ではガンダーラに種々の文化が混在していて、しかも彼自身、現在の中国領コータン出身ですので、その様な政策を意識的にやったのですが、ガンダーラという土地には、それがまた必然的でもあったのだと思います。

大乗教はこの様な文化的・社会的条件の中で、しかも上座部などからは軽蔑されながら、育ったのだと思います。

さらに三世紀に入るとシャプール一世[*13]がガンダーラをその領土とし、カニシカの子孫たちはシャプールに臣従することになります。シャプールはガンダーラの姫を自分の後宮に入れた（これは古代の征服者の常套だったのですが）。シャプールはガンダーラでマニケウス[*14]に遇った（？）と思います。

そしてシャプールはマニ教を、殆んど国教として採用するのです。

時にローマは分裂し、カエサル（シーザー）［＝皇帝］が二人も三人も立っていたから、彼はパルミュラ[*15]のカエサルを傀儡としてローマを攻略して、インドからローマに至るまでの全世界を統一し様とします。それにはマニケウスの教えはまさに、うってつけだったのです。というのは、マニケウスはゾロアスターの教えを深く調べ、さらに彼の生まれた家がキリスト教とユダヤ教の中間の様な宗教だったし、若い時にインドに亡命して大乗教を深く学んで、彼は仏教もキリスト教も、元を糺すとすべてゾロアスター教の分派であり、これらの宗教は本来のゾロアスター教にもどるべきだ、しかし当時、行われていたゾロアスター教は本来のゾロアスターの教えからかけはなれて

しまってるから、ゾロアスター教も真実のゾロアスターの教えにもどらねばならぬ！……というものでした。

これはヨーロッパからインドまでを統一しようとしていたシャプールにとってまたとないイデオロギーだし、またこの教えに接して世界統一を志したとも云えるでしょう。

しかし、シャプールにも寿命はありました。彼が死ぬと保守勢力がもりかえし、ゾロアスター教の僧侶達は異端マニケウスを磔りつけにしてしまいます。アンティオキアの総大主教だったマニケウスの使徒（師匠カ）パウロ[*16]も失脚します。しかしその弟子アリウスによってアリウス派キリスト教が生まれます。

マニケウスが住み、学び教えた町ペシャワール（プルシャプラ）に、それから一世代たってアサンガ（無着）が生まれ、その弟にヴァスバンドゥが生まれるのです。アサンガの先生だったというミトラは実在の人物か？神話的人物か？分らないのですが、実在の人物だとすればマニケウスその人か、その後継者だった可能性は非常に強いと思います。ヴァスバンドゥ（世親）はその様な系列の中で浄土教を説く訳です。

しかしヴァスバンドゥの体系は唯識と呼ばれるものなのです。前述の様に唯識（ビズナーナ）はグノーシスと同じことですから、キリスト教世界で、異端とされて行くグノーシスとマニ教との関連で考えるなら、グノーシスが、本来インド出身の哲学だったことが納得できるのです。そしてそのグノーシスこそ仏教で云う唯識ならば、唯識思想の祖と云われる弥勒菩薩はマニケウスその人、若しくはその後継者だった……（？）ということにならざるを得ません。

弥勒（ミトラ）は me ～ mi が語根で、見る、測るの意味だそうで、〈愚僧は駄洒落で me ＝目、mi ＝見だ！などと云ってます〉それに中性化の語尾 tro ～ tra がついてミトラになり、フランス語のメートルは目で寸法を採るから目ー採るだなぞと云っては馬鹿にされて居ります。

閑話休題！

そのミトラは尺度・寸法物指を意味し、尺度はその民族の契約ですからミトラは契約・友情（約束）となり、時間的尺度の規準は太陽でしたから太陽を意味する様になり、ミトラ神とは太陽だったのです。

尺度を決めるのは契約だと云いましたが、現実にそれを決定し強行するのは帝王でしたから、帝王のことも意味します。

そして、ミトラダーテスとかミトラ××なぞの名前は普通につけられ、とくにパルティア系[*17]の人に多かった様に思えますが、マニケウスはパルティア（安息＝アルサク）家の王子だったと云われ、マニ（宝・珠）ケウス（太子）だと理解されますので、本名はミトラ〇〇だったことも考えられないことはありません。……というのは彼自身、ミトラと名のっているからです。それは自分でメシアと名のっていますが、メシアはミトラのソグディア訛[*18]りなのです。そうして見ると、ユダヤ教で云うメシア（救い主、それはクロス二世の称号として使われた）は太陽神を意味し、本来測る・計る・契約を意味する言葉がヘブライ語的に誤訳されたのだと分ります。クロスを育てた人物はミトラダーテス（ミトラダーテスはミトラの従者の意味で、デーヴァダッタのダッタと同じことです――本来は授けられたの意味）です。ミトラダーテスは牛飼いで、クロスは馬小屋で育ったと云うのです[*19]。

今から二〇年ほど前に、エジプトのナグ・ハマディというところから発見されたグノーシス系の文書（福音書類を含む）によって、メシアという言葉が、元来は測る・計るという意味だったことが確認され、メシア・クロスのメシアは、測る→計測者→規準の決定権を持つ者→救い主（帝王）という、意味だったことが分るのです。

マニケウスの本名がミトラ＝メシアだとすれば、アサンガ（無着）の師だった弥勒（ミトラ）がマニケウスだった可能性は大きいのですが、マニケウスが十字架に磔つけになったのは二七五年とされて居り、アサンガの生れたのは三一〇年と推定されて居りますから、直接会ったことはなかったのではないかと思うのですが。

マニケウスの教えを俗化すると、「この世はすべて、夢・幻にすぎない」というテーゼで、唯識と完全に一致します。そして更にそのテーゼは、従っ

て虚偽の現実のこの世で権力が正義だとして強制執行するのは罪悪だということになります。だからマニ教は、世界中どこでも、弾圧、迫害されつづけた訳です（ヨーロッパのカタリ派、中国の白蓮教↓これは最後に義和団事件となって、人民解放軍にすくなからず影響があった（？）と思います）。

アサンガの弟だとされるヴァスバンドゥ（世親↑天親）も、弥勒の教えの完成、つまり唯識思想の完成者とされているのですが、そのヴァスバンドゥはまた、浄土教の鼻祖ともされる訳で（もっともその前に龍樹菩薩が浄土思想について言及しています）、これは多分、浄土思想の発生が、ゾロアスター教（マニ教・キリスト教も含めて）に由来してるからで、唯識思想と同じ基盤から来てることを証明してると思うのです。

ゾロアスター教の大きな特徴のひとつは終末思想にあります。善と悪の斗争がクライマックスになった時、宇宙は炎につつまれて没落し、悪はほろび善の種（タネ）がのこる（この辺のところは愚僧もまだ、よく分らないのですが、善の階級は極楽に往って生まれるということも云われています。一種の相転移でしょうか？）。この辺のことが世親のゴーシャ（倶舎）論に書かれているのです。

もち論、根本仏教に終末思想などはありません。

終末思想（仏教では末法思想と云うべきでしょうが）は、必然的に救世主を必要とします。ゾロアスター教ではアフラマズダと呼ばれました？（マニはこれに反対したのです。つまりアフラマズダは神様の固有名詞ではなく、アフラ＝主（英語の Lord に当ります。所有者）のマズダ＝光明・知恵で、全知（従って全能）の主（所有者）という普通名詞がむしろカテゴリーですらあるものですから、それを神の固有名詞とすることに、反対し糾弾したのだと思います）

愚僧は今日（こんにち）、ゾロアスター教というものが残っていて（インドのボンベイとその周辺）、そこに伝えられたパーシー教が、そのままゾロアスターの教えを完全に伝えているか？どうか？疑って居りますが、この終末思想は、一応、ゾロアスター教として纏められはしたけど、その起源は古代バビロニアさらにはシュメールにあったのではないかと思ってるのです。それを取入れて終末思想にしたのはゾロアスター教であって、ゾロアスターその人ではなかった！と思ってる訳です。

ソクラテスがＢＣ四七〇年頃の生れ、シッダルタがＢＣ四六三年とされ（中村元）、そして旧約聖書がＢＣ四〇〇年頃エズラによって編集され始めた。つまり殆んど同一時期だったことと、ペルシア帝国が、その時代に全世界にインパクトを与えたことの間には、キワめて密接な関連がある、つまり同一の人類史の出来ごとの、それぞれのローカル的現象だと愚僧は理解してる訳なのです。

もち論、浄土教の発生が天親（世親）の頃、四世紀だとすれば、クロスの頃から七〇〇年ほども経っていますから、当然のこととして、思想は混血に混血を重ねた後でしょう。

現にパキスタンで仏教遺跡を発掘してると、それがゾロアスター教になったり、その逆があったり、ガンダーラではゾロアスター教と仏教の区別はさだかでなかった面があったのです。

阿弥陀仏という言葉はインドまたはインドの言葉にはありません！南無阿弥陀仏――Namas Amidabudh という言葉はサンスクリット語では文法的に成立しないそうです。

南無阿弥陀仏という言葉が出て来る経典は、観無量寿経なのですが、従って、この観経偽経説が出て来るのです。

――これらの文献批判はやたら専門的で煩雑だし、第一私の力の及ばないことですから――

世親（天親・ヴァスバンドゥのいた頃つまり三一〇年頃、白菩薩（普通には仏図澄（ボドーサフ）と呼ばれる）人物が中国に来て、仏教を伝えたと云われます。[*20] それまでにも安息（パルティア）人とかクシャン（月支）人が中国に来て訳経した人は居た様でしたが、寺を建て教団を組織したのはこの白菩薩（仏図澄）が最初だと思われます。時の中国は、五胡十六国と云われた

時代で、仏図澄のスポンサーになった権力者は、羯族の後趙国で石氏を名のっていました。石とはタシケントのことで、タシケント出身のインド・ヨーロッパ系の人種だったと考えられる氏族が王朝を作っていたのです。

中国に入った仏教はインド・ヨーロッパ系（つまりイラン系）の人達のための宗教として、中国に入ったのです。

そしてその仏図澄（白菩薩）の孫弟子に慧遠［三三四―四一六］が出て、白蓮社という念仏結社を組織したのが中国浄土教の最初とされて居ります。もっとも禅でもこの仏図澄あたりから、その歴史を説く人も居ります。

その頃、阿波羅弥陀と書かれた仏があるのですが、これが後代の阿弥陀だと思われますし、その阿波羅弥陀は音から見てアハラミダはアフラマズダの音訳であるに相違なく、そうして見ると阿弥陀様の原型はアフラマズダだと考えられるのです。

阿弥陀はアミダであって、サンスクリットで云うAmitaはアミタです。陀はあくまでも〝ダ〟であって〝タ〟ではない！という論争もあります。経典には無量寿または無量光で無量は〝量れない〟。ミタ（これはミトラが約された形）に否定の接頭語Aがついた Amita ＝アミタだと書かれています。決してアミダではないのです。この辺のことはどうなるのでしょう。

誤訳もあるでしょうし、意図的に習合していったこともあるのでしょう。

ゾロアスター教関係の文献は大阪外大の伊藤義教さんのものが

①『ゾロアスター研究』岩波書店［一九七九年］

②『古代ペルシア――碑文と文学』岩波書店［一九七四年］

ロマン・キルシュマンの

③『イランの古代文化』平凡社［一九七〇年］

しかしなんと云っても足利惇氏教授の

④『ペルシア宗教思想』国書刊行会［一九七二年］

がよいのですがこれは現在、手に入りません。

*1 (B.C.600?-529)アケメネス朝ペルシア初代の王。

*2 武野紹鴎（一五〇二―五五）のこと。戦国時代の堺の豪商で茶人。

*3 松永貞徳（一五七一―一六五四）のこと。俳人で歌学者、貞門派俳諧の祖。

*4 生没年不詳。室町時代、将軍側近の同朋衆として、立花（華道）の確立に貢献したとされる。

*5 「解放理論研究会テキスト No.2」（＝『CP解放運動のめざすもの（他二編）』解放理論研究会テキスト（三版）所収の「解説（解放理論研究［会］テキスト）」）のことを指すのであろう。「大仏空著作集（二）」（『島根大学人間科学部紀要』六、二〇二三年）の「Ⅱ障害者解放に向けて」所収。

*6 ササン朝ペルシアで、ゾロアスター教、キリスト教、仏教が混淆して三世紀に成立した宗教であり、二元論的色彩が強い。

*7 大仏の蔵書のなかに、『パキスタン・ガンダーラ美術展図録』（日本放送協会、一九八四年）が残されており、東京展の会期は一九八四年二月二五日～五月六日となっているので、この書簡はこの時期に書かれたものと推定される。

*8 (B.C.588?-486)アケメネス朝ペルシアの王。

*9 文語訳聖書の表記による。

*10 サカ族は、紀元前六世紀に中央アジアに登場するイラン系の遊牧民族のことで、シッダルタの釈迦族とは異なる、と一般にはみなされている。大月支（氏）は、紀元前三世紀から一世紀にかけて秦の北方から中央アジアにかけて展開した遊牧民族の月支（氏）のうち、中央アジアに進出した一族を指す。

*11 紀元前二世紀後半、インド西北部を支配したインド・グリーク朝のギリシア人の王メナンドロス一世と仏教の僧侶ナーガセーナが問答を交わした（『ミリンダ王の問い』）ことを指す。

*12 この記述があるのが「トマス福音書」だというのは誤りで、正しくは「トマス行伝」である。この文書に登場する「グンダファル王」は、一世紀頃、インド北西部にインド・パルティア王国を建設したゴンドファルネス王のこととされている。

*13 ササン朝ペルシア第二代の王（在位240-70）。

*14 ササン朝ペルシア発祥のマニ教の創始者マニ(216-277)のこと。ラテン語の Manicaeus に由来する呼び名。

*15 シリア砂漠のほぼ中央に位置するオアシス都市。東西交流の中継地でもあった。

*16 サモサタのパウロス（生没年不詳）のことか。モナルキア主義（神の単一性を強調する立場）の代表者の一人とされる。

*17 現在のイラン北東地方の古称。紀元前三世紀半ば、アルサケス一世が王国を樹立

した。

*18ソグド人のこと。サマルカンドを中心に中央アジアで東西交易に従事したイラン系の民族。

*19紀元前二世紀のパルティア王国の著名な王、ミトラダーテス一世のことではなく、紀元前六世紀のアケメネス朝ペルシアのクロス二世を育てた牛飼いの名前が実はミトラダーテスだったという趣旨である。

*20月氏とも。紀元前三世紀から一世紀にかけて秦の北方から中央アジアにかけて展開した遊牧民族。中央アジアに進出した一族を大月氏、中国西部に留まった一族を小月氏と呼び、後者はまた羯族とも呼ばれる。*11も参照のこと。

17 CPについて（一九八四年？）

大仏　空

過去二五年間ほどを、障害者と一緒に暮らしてきた訳ですけども、一緒に暮らしてきたというのは、施設の職員としてというのではなく、本当に私個人のわがままで、たまたま商売が坊主でしたので、そのお寺に、何人かの障害者が、私と一緒に共同生活をするという形で二五年ほど暮してきたのです。私としては単に暮すというだけではなくて、そこには一つの目標がありまして、障害者、といってもこの場合はCPなのですけれど、CP解放というのはどういうものであるべきかということを、一緒に暮している連中と共同生活するなかから探っていく、という、そういう目標で暮してきた訳ですが、ここでその脳性マヒ者、CPと申しますが、CPというのがどういうものか、ということを説明いたします。その障害の状況については、たまたま町でお見かけになることもあると思いますし、テレビなんかでも時々は、この頃はよく知られるようになってきたと思います。私たちの目から見ればまだまだ足りないのですが、私が二五年前にそういうことに首を突っ込んだ時から思えば、数段と知られるようになった訳です。

一言でいうと、赤ん坊の時に、だいたい妊娠中から、生後三年くらいの間に、脳に、脳の一部に障害が起きる、起こってしまう。それはいろんな原因があって、お産なんかによる死産なんかで酸素欠乏の場合に、脳がさっさと脳の一部が死んでしまって、他の身体の部分は生きても脳は簡単に破壊されてしまうということがあって起きる。言うなれば年を取ってからなる中気と同じでして、それが赤ん坊のうちに起きてしまう中気のような現象な訳ですけれども、そういう障害でして、したがっていろんなところに、身体全体の命令系統を脳が受け持っているので、身体全体のいろんなところに障害が出てくる訳です。それで手、足はもちろん、目、耳とか、あるいは知能にまで障害が起きたりする。言語障害なんかも起きたりする訳ですけれど、重度の人の場合は一生寝たきりというようなことにまでなる訳です。

で、こういう障害がなぜ起きるかと言いますと、一足す一が二というふうに、数学のように簡単に図式化はできないのですけれども、大雑把に言えば、人間というのは脳を持っているから脳性マヒが起きるのであります。脳がな

ければ脳性マヒは起きない。つまり脳がないような動物、いわゆる下等動物では脳性マヒは起きない訳で、高等動物である哺乳類なんかでも、人間だけが、脳性マヒというものを持っているのでありまして、それは人間が他の動物と違って、哺乳類でもですね、他の哺乳類と違って、やたらと脳味噌を、とくに大脳というものを大きくした。そのことが人間を作った。だから脳性マヒが起きる。つまり人間というのは、その、人間たりうるためには大脳を大きくしなければならなかったのですが、その大脳を大きくすることによって、つまり大脳皮質がやたらと大きいということは、生物としては非常に異常な状態で人間というのは生きている訳で、安定性に欠けている訳です。したがってまずお産から始まって、障害を起こしやすい。障害といいますか、いろいろな危険を孕んでいる。とくに脳に対して危険を孕んでいる動物でして、起きる訳ですから、人間は知能、文明、文化などというものを手にする代償として脳性マヒを作ってきた。こう言っていい訳で、こういう状況というのはどういうことかと言いますと、生きるということは、絶えずその、何ものかを犠牲にしている、という訳です。つまり脳性マヒというものは、人間が生きるため、というよりも、文明とか人間らしく生きていく、つまり知能を持って知恵を持って生きていく、というために、その代償として、犠牲として存在する、そういうものなのだ、ということです。

これは先ほども申しましたように、人間が生きていくからには、人間と限らないかもわかりませんけれども、あるいは何事かをやるからには、絶えず犠牲というものが付いて回るのだ。犠牲というものが、マイナス面というものが決して存在しない、そういうあり方というのはこの世には何も存在しない訳で、人間が知能というものを、さらに言えば言語や文明というものを持つという、その代償というものが、まず脳性マヒあるいは知恵遅れという形で、脳を中心に起きてくるのだと言っていいのだと、まず思わなければいけない。だから、私が、いや私だけではなくて、私だけでなくてというよりも、私が長いこと関係してきました脳性マヒ者たちのグループである「青い芝の会」という全国組織では、ＣＰであるということは、人間が文明というものを、知恵というものを、持ちえた代償として、犠牲を強いられている存在なのだということを基礎にして、その犠牲としてのあり方というものを、社会に、文明のなかにはっきりと認めさせて確立させていかなければならない。それは、あるいは制度とか何かかもわかりませんが、法律ということかもわかりませんが、さらに人間の考え方として、文明として、行動規範として確立させなければならない。

つまり単に法律とか制度とかだけではなくて、根っこの深い、もっと人間が生きていくための、もっと基本的な根本的なものとして、それを何と呼ぶか、文明と呼ぶのか、文化と呼ぶのか、あるいは宗教と呼ぶのかわかりませんが、そういうものとして確立されなければならないと思っている訳です。

日本の神話のなかに蛭子（ひるこ）という神様が出てくる訳で、このことはやはり蛭子が、これはＣＰであると言い出したのは、私と私の友人なんかが話しているなかから出てきた訳ですけれども、何歳になっても足腰が立たない、ぐにゃぐにゃの生き方だったというので、これは明瞭に形から行けばＣＰに該当する訳ですけども、もちろん神話ですから、神話というのは一つのことではなくて多くの歴史とか、社会の状況とか、あるいは深層心理の問題とかいうことが関係していますから、単純に一つのことでは解釈できないでしょうけども、そのモンタージュされたいくつかの要素のなかには、もちろんＣＰが入っていると考えていい訳ですけども。

役に立たない神様と思われたのか、葦船に入れて流されてしまうという話が、古事記や日本書紀に出てくる訳ですけども、この葦船に流されるということは、世界的にこの話はある話で、一番古いのは多分ペルシアあたりの神話だと思うのですが、もちろんユダヤ教の方にも、ユダヤの神話というのはほとんどペルシアの神話から来ているので、そっちの方にも入っていますけども、それと、日本に来たのが機を一にするかどうか。私は、だいたいもとは同じものだと思いますけど、単に、邪魔だから流したというだけではなくて、犠牲として、生贄として葬ったのだと。そのことによって多くの人が罪を逃れることができた。日本的に言うと厄払いという訳ですけれども。そういうものとしてＣＰが描かれている。

日本の各地にある民俗行事のなかで、流し雛というのがありまして、三月三日にお雛様（さんだらぼっち）お内裏様をですね、男の方と女の方と男雛と女雛とを、舟とかあるいは桟俵法師に乗せて流す、あるいは燃すというところもあるようです

けれども、そのことによって一年間の無病息災を祈願するといいますか願うという。そういうことが各地で行なわれている訳ですけれども、そこで男雛と女雛というものが、お内裏様と言って、天皇と皇后に当たるのだということを記憶しておいてほしいと思います。

そうしてみると日本の神話ないしは歴史と言っていいかもわかりませんけれども、お内裏様に当たる天皇と皇后、とくに天皇というものが、絶えず流し雛の役を受け持ってきたということが言える訳で、厳密に言うと天皇というものが、天皇という言葉がその時代においてすでにあったかどうか、まずそれが問題ですけれども、たとえば神武天皇というのは、これは長男ではない訳です。その親にあたる海幸彦、山幸彦においても同じです。兄の方は滅ぼされていく訳です。神武天皇も、兄貴たちは、神武政権が確立するまでのあいだに、矢が当たったり病気になったりして死んでいってる訳です。で、二代目が綏靖とか安寧とか、一〇代目の開化天皇、そして応神天皇に至るまで、長男というのは決して皇位を継げないという形をとっている。一番有名なのはヤマトタケルで、ヤマトタケルはある意味では双子であったとも言われていますが、ある意味では天皇の位に就いていいはずだったのですけども、これが、就いていない。代わりに仲哀さんという人が天皇の位に就くというふうに、日本が、その仲哀さんの以後の応神天皇あたりから、日本の歴史はどうやら歴史的になってきて、その前は単なる伝説というか、神話の世界でしかないというふうに言われている訳ですが、日本の神話の世界では、王位に就くべき人は絶えず王位に就けないで、王位に就く次ぎの人がなったということです。

このことを考えてみると、魏志倭人伝に出てくる持衰（じさい）、ジという字は、持つという字、手偏に寺という字ですね。サイは喪失する、喪う、喪儀の喪ですけども、[*1]それを書いてジサイと読むらしいのですが、このジサイという役目が出てきていて、これは、髪も櫛削らず、風呂にも入らず、女性は近づけず、ただひたすら神に安全を祈っていて、もしかしてその集団に、この場合は船なんですけども、船に乗せられて行って、船が遭難する場合には真っ先に、この人が生贄となって海に投げ込まれるという存在で、日本の皇位継承者のうちの、第一番目の、それが大御とか呼ばれていたという説があるのですが、オオイゴとかオオゴと呼ばれていたこの人たちは、絶えず神に祈るだけが職業で、もちろん肉食妻帯なんかもしないで、それこそ髪も櫛削らず、風呂にも入らず、おそらく垢だらけだったと思うのですけど、そういう形で自分たちの集団の安全のための生贄となって神に仕えていた。それで、もしかして何か災害がある時には、これが本当に血祭りにあげられるというのが、本来の王位継承者、つまり天皇というものであった。

また、魏志倭人伝に出てくる卑弥呼でも、卑弥呼は女王ではあるけれども、実際の政治というのは弟、男弟、男の弟という字で書かれている、それが実際の政治を握っているのであって、女王と呼ばれていた卑弥呼は鬼道をよくする、要するに神に仕えてシャーマンとしてだけ存在していて、実際の政治にはタッチしない。実際の政治は身代わりの人間がやるという形をとってきた。というのが、日本の神話なんかに書かれている古い王位のあり方だったというふうに思う訳ですが、そうしてみると、古代においては、生贄、犠牲者というものが、絶えずあることによって、その集団の安寧と秩序が保たれている。これは世界中どこでも同じで、いわゆる犠牲というのは sacrifice、サクリファイスというのは、犠牲というふうに訳されますけども、語源的には、聖なるものという意味すらあるので、いろんな所の歴史で、キリスト教でも、キリストが生贄となってみんなのための、人類に福音を伝える、その生贄となって彼は十字架につけられる、という形をとっている訳ですけども、こういうことは、世界中のどこにも古代にはあったことで、いうなれば今日だってある訳です。

ただそれが、古代と［は違って］今日では、自覚がされていない。つまり水俣病などによく表されている訳ですけども、金儲けをするためには、必ず何者かに犠牲をこう与えるのだということを考えないで、金儲けだけしていく。その結果、あとで気が付いてみたら非常に多くの犠牲者が出る。だけどもそれは、公害防止のための予防策をすれば、それですむではないかというふうに考えるならば、悪い事態をもう一度悪い事態で防ごうとするだけのことで、何事かをやる時には必ず犠牲というものが付きまとうのだ、犠牲というものなしには人間は何事も成し得ないのだという、そこには辿り着かないで、犠牲というのは技術的に防げるのだという考え方に立って物事を処理し

ようとしているのならば、それはとんでもないことなのだというふうに、私たちは考えている。だから、現代文明というものが、犠牲ということを省みることなく、成立してきたというふうに批判している訳です。で、そういうものを考えないように考えないようにしてきた。それが近代というもの、近代というものの歴史なのだというふうに思っている訳です。

それがどういうふうにして行われてきたかというと、労働という言葉のなかに最も端的に表現されているのでして、労働という言葉は、日本では明治以後成立したと思いますし、おそらく外国でも産業革命以後成立してきた。たとえば英語で言っても、work という言葉と労働党の labour とは意味が違いますし、日本でも働くということと労働というのは相当に意味が違う訳です。ところが、働くということと労働ということとが、なんの反省もなくごっちゃに考えられているところに、日本の資本主義のインチキというものが、無自覚性があると私は思っている訳です。無批判性と言ってもいいでしょう。

労働というものを、その人間が労働をする時には必ず犠牲者を作っているのだという反省がなされていない。それは、たとえばマルクスの言葉で言えば、労働の二重性格とか二者闘争的性格というふうにマルクスは言っている訳ですが、近代的な意味での労働というものが、個人の成立、近代的自我というものの確立と同じことの裏表をなして成立してきたと言う。近代になって、近代的自我と言いますか、個人の自由というものが確立されてくると、そのなかにどっぷり浸かって物事を考えて、近代的自我とか個人の自由とか呼ばれるものが、どのようにして、どのような歴史を経て、確立されてきたかということに対する、反省とか考察とか、そういうものを一切なしにして、当然のことだという建前でものが考えられ、労働ということが云々されるというところに、今日の障害者、CPを弱い立場、みじめな立場に追い込む、桎梏と言いますか、足枷がそこにあるのだというふうに思う訳です。それはたとえば、何か就職というようなことがあれば、当然、健全者とCPが同時に就職を希望すれば、それはCPの方が落とされて、健全者が就職できるということに、最も単純明快に表現されている訳ですよ。近代産業というものが、そういうCPの者は役に立たないと烙印を押すことによって、近代というものは成り立ってきたのだと、そう言ってまずいいのだというふうに思います。私たちは、そういうような近代というものを、もう一回基本的なところから問い直す、何事をするにも必ず犠牲というものが付いて回るんだということ、またあの橘孝三郎[*2]先生が言ってきたことと関連して言うならば、天皇というものが、その近代国家の代表として、近代国家のシンボルとして存在してはいけない。天皇というものは必ず流し雛になって、みんなの罪を背負って絶えずぶち殺される運命にあるものだと、その時において初めて天皇としての意味も存在するのだというようなあり方を、我々は探して、追及して、確立していかなければならないのではないか、というふうに私は、思っている訳です。

私たちが、古代から中世を経て、近世、近代という歴史を歩いてきて、その時にいったい何を失ってきたか。まあ、いろいろ言い方はあると思います。ある一つの言い方でそれを集約的に表現するとするならば、それは敬虔性の喪失。それは experience の経験ではなくて pietät と言われる敬虔。つまり何と言うのですか、敬って、あれは何というの、慎ましやかではなしに、つまり何者かを畏れるという意味の敬虔なのですが、このピエテートという言葉は、パトリキーとかそっちの言葉と関係がある。つまり忠誠心みたいなことと関係がある訳で、そのさらに語源は、家父長、英語で言うファーザーとかパードレという、それとも親戚の言葉で、つまり、親子関係とか、肉親の持っている理屈を抜きにしたところの人間関係というものが、敬虔というか忠誠というような言葉のもとにある言葉だと、まあ思われる訳ですが、そういうものを、人類は近代というものを確立する時失ってきた。そして、ピエテートの正反対のものとして、ピエテートを失うことの代わりに作られてきたのが、いわゆる近代的自我と呼ばれるものだと考えていいんじゃないかと思う訳です。

近代的自我というものが確立するには、人類は何百年の間いろんなことをして革命をしてみたり、弾圧をしてみたり、されたりしながら作ってくる、確立してくる訳ですけれども、別の言い方をすれば、生活領域の拡大でして、その反対が、つまりピエテートが成り立つような社会というのが、どういうことかと言うと、生活領域が狭い社会な訳で、血縁的な忠誠心というか友愛・親愛感みたいなものが成り立つ社会を否定することによって近代社会がで

き、近代的自我というものが確立されていった。そして、それを成り立たせる基礎条件として、産業革命、産業革命のそのまたもとにあった交易圏の拡大、具体的にはヨーロッパで、まずアラビアあたりとの交易から始まって、それがイタリアのアドベンチャラーズと言われる冒険商人あたりだけのものだったのが、だんだん北欧の方にも広がっていって、それが産業資本というか、アドベンチャラーズではなくて、自分たちでも物を製造しながら商売していくという商人に変わっていって、産業資本が形成されていくという。それで、アラビアとイタリアの商人の取引だけだったのが、さらに北欧の方からインドとかアジア、東洋の方にまで地域が拡大されていくというなかで、産業革命が起きる下準備というのがなされていった。そのことと同時に、広い世界を知っていくなかから、ピエテートが成り立っていた、つまり血縁的友愛・親愛で結ばれた社会というものが、壊されていくということと、それが同じことであった。

さらに産業革命になるには、いわゆる絶対王政なるものがそこに存在した訳で、まあ、ヘンリー八世が一番最初の絶対王政をやった人だと言っていいのだと思いますけれど、そのことによってイギリスはいち早く産業革命を起こしえた訳ですが、これも、絶対王政だけでなくて、絶対王政とその正反対のピューリタン革命とが一体になって、産業革命、そして近代的自我の確立ということになっていった訳ですけれども、絶対主義の確立ということが近代的自我の確立ということと裏表をなしている。片一方は王権なり、政治の権力の絶対性を主張するものであり、片一方は、その逆に個人の自我の自由というものを主張するものと、正反対のように見えますけれども、これは歴史的事実として見てほしい訳ですけれども、これは同じことだったということですね。だから我々は、近代的自我が確立するということは、絶対王政からさらに近代国家というものが生まれてくることと、近代的自我というものとが同じこととして歴史を歩んできたし、そういうことで私たちの思想なり感覚なりというのが作られている訳ですから、そうやって見ると今日私たちが、そういう歴史のなかで失ってきたものは、つまりピエテートというようなものは、どういうふうにして失ったかと言えば、絶対王政が、そして近代国家というものが、人間の持っている友愛・親愛というものを失わせてきたのだ、とこう言ってまず間違いない。近代的自我というものによって我々は、人間としての親愛の情というものを失ってきた。そういう社会では人の為に犠牲をするというような感情は成り立ちえない。

にもかかわらず、現にCPというものがあって、本当のことを言えばCPだけじゃなくて多くのものがあると思うのですが、私の立場からはCPのことしか話ができませんので、CPだけに関して言わせていただければ、CPというものは、人間が生きていく、単に生きていくだけでなくて、文明とか知恵とかというものを持って生きていくための必然的犠牲だと、サクリファイスなのだと言うのならば、何としてでも人類社会に連帯というものを、友愛、ピエテートのもとになるそういうものを取り戻さなければならない、ということになります。

どのようにしたらそれが取り戻せるか、それはまた、天皇というようなものが、生贄として、流し雛になって葦船に乗せられて、流されうる社会でもある訳です。そういう社会というのはピエテートという言葉のもとにある通り、血縁的感情が持てる、つまり運命共同体としての意識が持てるような社会。このピエテートという言葉は、それは血縁的な友愛を基礎にした言葉でしょうけれども、必ずしも生物学的な医学的な意味での親愛ということではなくて、運命共同体って、こう中曽根さんがアメリカに行ってしゃべっちゃったので[*3]、私が使うと、ちょっと中曽根さんと誤解されるおそれもあるのですが、中曽根さんの言っているのは、あれは口先だけのことですから。本当の意味での共同体的な社会というものを作り直さなければいけないのではないか。で、私は、毛沢東のやった人民公社というものに、その夢を持っておりました。

人民公社では、政治とか経済だけではなくて、あるいは立法とか、司法とか、あるいは教育、軍事に至るまで、人民公社において行うというのが毛沢東の理想だったのだ、と考えていいと思うのです。それはある意味では小さな一つの国家を作って、中国全体を、小国家群に作り直して、中国というものはそれの自治連合、連合自治ということを毛沢東は言っている訳ですが、そういうものにするという考えだったと思っていいのですが、それは反近代だった訳です。そういうことをしていれば中国の近代化というのはますます

遅れる、そう考えて鄧小平は、毛沢東が死ぬとそれを全部廃止していって、近代化路線というものを歩み出した訳ですけれども、私は、毛沢東の行き方の方が、正しかったのではないか［と思っています］。ただし、ここで誤解がないように言いたいことは、そういう素朴な農村共同体的なものがいいというふうに言うと、日本においても各農村の部落というものが、一種の、やはり共同体意識が強い訳ですけれども、日本の現在行われている部落の共同体というものは、一方において明治以後の激しい、そしてとくに高度成長以後の日本の「他人くたばれ我繁盛」的な文明のなかにさらされて、かすかに昔の共同体意識だけを頼りに、ボス結合による選挙が行われるというようなものは、あれは、そういう連帯を全然、そのピエテートとかサクリファイスというような連帯が成り立つようなものとは全然違うのだということだけは特に記憶に残しておいていただきたいと、思います。

*1持衰の「衰」に「喪」の字を当てるのは、大仏の思い違いであろう。
*2（一八九三―一九七四）茨城県出身の農本主義者で国家主義者。アナキズムの影響を受け、五・一五事件にも連座している。
*3中曽根康弘が、レーガン大統領との会談で「日米は運命共同体である」と発言したのは一九八三年一月のことであったから、この録音はそれ以後のものと考えられる。

18 最後の言葉（一九八四年）

大仏　空

わが国に仏教が公式に入って来たのは、欽明天皇の時代ですが、すでに渡来人などによって、広く土着していたことが、遺跡や出土品などによって分かっております。それは仏教と云うよりシャマニズム（鬼道）と呼ばれるもので、朝鮮・中国はもち論、イラン・インドなどの影響の強いものだと考えられます。（マジナイ＝呪い、という言葉は古代イラン語に起源があると考えられます。）

また、天の岩戸やスサノオ命の神話もインド・イランの神話にその原形があります。欽明天皇のお孫さんにあたる聖徳太子は、日本文化の基礎をかためられましたが、その指導理念を仏教にされました。しばらくは輸入仏教がハナやかで、役の行者に代表される土着仏教は、むしろ弾圧されましたが平安時代になると輸入仏教も土着化しました。

とくに聖徳太子にはじまる法華信仰は女人往生・悪人成仏の教えとして定着し、後に鎌倉仏教と呼ばれるものを、育てました。鎌倉時代以后は、文学・華道・演劇・芸能さらには武道まで、その論理によって完成され、「おのれ」を棄てきった時、「おのれ」は完成する！この論理を「サビ」と云いました。

サビはスサビの略語で、スサノオ命は荒々しい、スサビ＝悪の神格化として、その悪行の故に、故郷（高天原）を追放された放浪者でした。つまり悪人は一所不定・行雲流水。それを現代風に云えば、たえざる自己批判で決して、自己に安住しては不可ないのだ！と云えます。

日ごろの心は欲望そのもので隣人をふみつけ犠牲にして、すこしでも人より先にでたいと云うこころしか持ち得ない「おのれ」だとさとる時、懺悔が起きます。懺悔は大悲心と同じで、すべてを棄てること、名もしらない他人のためにも命を棄てる決意、それが懺悔です。ここに人間の連帯が生まれます。南無阿弥陀仏[*1]

*1この文章は印刷されて大仏の葬儀の参列者に配布されたが、この名号はその際、増田レア氏によって付加されたものである。

付録

19 大仏晃雄宛書簡（一九四九年七月？）[*1]

大仏　晃

しばらく手紙を出さなかったので字を忘れては居ないかと心配しながら書いて居ます。店の方は大事もなく事えて居ます。そして菊田さんの小父さんの肝入りで出来た「ヨロコビーノ児童オルケストラ」は朕（ママ）の指導と指揮で大分旨くなりました。

教会の聖堂の工事も着々進んで居ます。四百万の予定が六百万円にはね上ってしまいましたが、仕事はどん〳〵進みます。僕は信徒総代の店で働いて居て神父様が非常に僕を可愛がって呉れて居るので良く知っていますが、その六百万円の内一銭としてハッキリ出所の解って居る確実な所はありません。唯はっきりして居るのは神（天主）への絶対的信頼、それだけです。勿論神父様はイタリヤ・アメリカ等に居る知合の人達に寄附をたのんで相当な手紙も出したり東京に行ったりして金を集めて居ますが、そういう時間はほんの少しで、大部分は祈りと布教に費やして居ます。六百万円の金は天主に祈れば必ず出ると思って居るのです。そして亦そうなって行くのです。現に毎日人夫達に二千円位づゝ払って働かせています（十五、六人）。またちょい〳〵セメント（材木）釘を何万円と買集めて居るのです。

たゞ神への信頼があるだけで此れだけの事を行って居るのです。

今、仏教界に此れだけの信仰と意志と実行力を持って居る人物が一人でも居りますか。なるほど村岡さんは金の集め方は旨いかも知れないが段が違うし、その信仰となるや問題にするのも無意味です。カトリックの神父様達は皆此の熱烈な信仰と実行力を持って居ます。そして「キリストの神秘体」と言って神父同志は本当の兄弟の様に、それ以上に仲良く結び合って居ます。仏僧達の間に虫眼鏡で見ても見られぬ現象です。何故でしょう。神父様達が家庭を持たないという点もあるでしょうが、カトリックという宗教その物がそういう性質なのです。だから信者（真面目な）達は本当に仲良くなってしまいます。これは神父様達（方々の教会の神父達）が仲の良い影響でしょう。日本に於ける堕落し切った宗教の中に育った僕の目には、此の宗教は正に廿世紀の奇蹟です。十二使徒以来そのまゝの信心を持ち続けてきた教会、将に驚くべき事実です。

若い僕は、非常に野心的だった父親の影響を受けて、一の野望を持って居た。一大宗教を創ろう、キリスト教的信仰に仏教的儀式を加えて社会を救おう、救えなくても後世に名を残して遺ろうと考えたが、カトリック教（公教（天主公教）を深く勉強して来たらそういう気持ちがなくなった。基督教的信仰と仏教的儀式は、お母さん見たろうが、完全にここに於いて一致して居る。それ所か仏教の儀式は、公教（カトリック）のものが遠く伝来して東洋的になった物であるという事が明らかになって来た。新教（メソヂスト、パプテスト、フレンド、日基、聖公会、救世軍）きり知らない人は可哀そうだ。

そして仏教（日本に於ける）も今の堕落振りではとても生きかえる見込はない、と診断した。たとえ立ち直ったとしてもその間に公教（カトリック）との勝負は定ってしまう。この小さな別府だけで、二つの孤児院と一ずつの養老院病院などを経営して居るのは、お母さんも見て帰った筈だ。長崎のポルトガル人の神父様達は戦争中監禁されて居て、終戦後、長崎の元の住いに帰った時、一面の原子野で教会もふっ飛んで居た。そして小さな家に入って明日のパンの心配をしていた時に、表の戸をたゝく者が居た。それは警官に連れられた原爆孤児だった。その神父様はすぐその子をひきとった。そして明日になればなくなるそのパンを与えてしまった。そうしたら警察・市役所・県等で連れて来るは〳〵、今では五百人の孤児の明日のパンの心配をしなければならなかった。神父が立派に天主の聖名に依って育てゝ居る。九州に限った事ではない。戦前戦時中、非常に弾圧されて居たのでこれだけの力を何処に蓄えて居たのだろうか。それは三百五十年の間、はなれ島に逃げ山奥に陰れて、七代後にパッパ様（法皇）の救いが来ると信じて信仰を捨てなかったクロ衆（切支丹衆）によって明らかだ。この間来た日本人神父様の居る島は、何千人が全部が四百年前からの信者達だ。

そうだ、長崎附近にはそんなのが数えられず居る。

此の信仰の力が敗戦日本、否、全世界を永久に救う原動力になると思う。新しい野心に依るインチキ宗教等は創るべきでないと悟った。

そして僕はもっと深くに自分の霊魂を愛し度いから、しばらくどこかの修

道院に入ろうと思う。祈る事と働く事に基礎を置いた生活、俗界と隔絶した生活、言葉無しで生活し手真似で話してもいけない生活である。
そして遠永の御父に近づこうと思って居る。

［七月一六日］
此の間の手紙を読みましたか。あれは幾らかの誇張が入って居ます。実は修道院に入るには、入る前の験（コヽロミ）として、亦た準備として、修道士の見習を遣らされるのです。そして、その修道会の会議で許しを受けた者（行儀や操行、身持などの良いと認められた者）が修道士になれるので、いきなり修道士にはなれないのです。
だから僕は見習になって自らの悪い性質に幾らかの改善を試（コヽロミる）みるのです。それには四、五年位は見習を遣り度いと思って居ます。ですから、正式の修道士ではありませんから、衣服は若しかすると幾らか親に尻拭をして貰わなければならないかも知れないと思いもしますが、多分そんな事は無いと思います。
兎に角、すっかり世を捨てゝ修道院に入る訳ではなく、修身・修道の為に見習として暫く入るのですから、その積りで居て下さい。 Osaraghi
九州は針葉樹（松杉）よりか広葉樹が多いので、木の葉の青いのが殊更目に付きます。

Osaraghi
Osaraghi

*1 二通の書簡のうち、二通目の消印は一九四九年七月一六日と判読できるのだが、一通目の消印は判読できず、このため七月近辺の投函としか言いようがない。

解題

14「茨城の郷土史散歩から見た本願寺の成立」は、『日本仏教研究』二九（一九六九年一月）に「報告」として掲載されたもの。一九五八年に創刊された『日本仏教研究』は、中村元や家永三郎、森岡清美、大橋俊雄等錚々たるメンバーを擁し、仏教学者のみならず、歴史学者、社会学者、宗教学者も多数参加する学際的な「日本仏教研究会」の機関誌であった。内容的にはおそらく、大仏の蔵書に含まれる井上鋭夫『増補版 本願寺』（至文堂、一九六六年）を参照しつつ、茨城の郷土史研究の成果も援用しながら、本願寺の起源が常陸に求められるべきことを主張する。柳田や折口の民俗学も視野に収める広範な読書に裏打ちされた労作と言えよう。

15「将門の一族を考察する」は、一般向けの歴史雑誌『歴史読本』一九七二年六月号「立体構成平将門」の「読者招待席 平将門研究募集」に応募して採用されたもの。平将門にまつわる板東平氏の系譜を辿りながら、承平天慶の乱の背景に、「傔馬（しゅうば）の党」を典型とする「賤民」階層の存在を指摘する。

もとより専門的な歴史学研究の立場からすれば限界はあるだろうが、大仏の歴史認識、とりわけ具体的な地理状況や民俗学的知見もふまえた分析はなかなか興味深い。増田レアさんによれば、大仏は、マハラバ村の脳性マヒ当事者たちをマイクロバスで連れ出して全国各地の神社仏閣を回ったというが[1]、その際にも、これら二編の論考が如実に示しているように、独自の歴史観に基づく大仏の博覧強記ぶりが遺憾なく発揮されていたことだろう。

16「竹本信弘宛書簡」は、「はじめに」でも触れたとおり、そもそもの出会いがどのようなものであったかは分からないが、獄中の竹本に宛てた書簡の控えである。おそらくノートに記されていたであろう下書き原稿のコピーであるが、三部に分たれ、そのうちの分量の多い二部にはナンバリングが施されている。増田さんによれば、大仏の追悼集会に寄せた竹本の書面では、一九八四年の二月から六月まで、八通の書簡のやりとりがあったとされる。竹本の返信は残されておらず、また三部の実際の先後関係も不明であるが、本稿では、一（ブッダにまつわる仏教の原点）、二（仏教における「弁証法的実相論」の理論的展開）、三（仏教とゾロアスター教等他宗教との関わりの歴史的展開）という順に収録した。

内容的には、本著作集（二）収録の11『解放理論研究会テキスト』や12『CP解放運動のめざすもの（他二編）』中の「解説（解放理論研究［会］テキスト）」と重複する部分もあり、またおそらく竹本の質問に答える書簡という事情もあるのだろう、論旨が一貫しない印象は拭えない。しかしながらその説明は懇切なものとなって議論も深化されているのは明らかであり、死の直前まで書き継がれたこの書簡が、大仏の思想のひとつの到達点と目される所以でもある。仏教の唯識論や浄土思想さらにはユダヤ教の起源に、ゾロアスター教を据える大仏の立論[2]はいささか勇み足のようにも見えるが、ガンダーラ地方においてゾロアスター教やマニ教とキリスト教や仏教が複雑に交錯していたことは、今日では学界の常識となっている。

17「CPについて」の録音は、文中の註記*3でも触れたとおり、早く見積もって一九八三年一月以降のものということになるが、冒頭で障害者と「二五年間ほど」共同生活をしてきたという発言があるので、一九六〇年六月の安保闘争を契機に障害者運動に関わったという大仏自身の証言[3]を勘案すれば、おそらく一九八四年、最晩年の録音とみていいだろう。

当初、増田さんによる文字起こし原稿を読んだときには、CP当事者ではない第三者が聴衆として想定されていることや、茨城出身の農本主義者橘孝三郎への唐突な言及があることから、大仏が関わっていた全日農や社会党関連の会合での講演ではないかとも考えたのだが、増田さんの御好意により実際の音源に接してみると、その可能性は薄いように感じられる。録音には講演会特有の雑音は一切入っておらず、周到に何度も録音し直した形跡が見られることから、むしろ不特定多数へのメッセージを意図した、自宅での録音ではなかったかと推測される。

内容的には、CPの存在を人間文明のサクリファイス（犠牲）と位置づけつつ、本著作集（二）所収の9「社会福祉は治安維持の道具か」における「持衰」の議論を敷衍して天皇制批判にまで結びつけ、さらにはピエテート（敬虔性）[4]の欠落に近代社会の欠陥を見出して、あるべき共同体の理念像として人民公社に着目する立論は、これまでの大仏の論考には見られない新たな展開である。CP解放に向けての実践的構想を打ち出すという点において、この論考もまた、大仏の思想のひとつの到達点を示すものと言えよう。

18「最後の言葉」は、おそらく死期を予期していた大仏が印刷業者に委ね、一九八四年七月の大仏の葬儀に際して会葬者に実際に配布されたものである。「悪人成仏」、「サビ」、「一所不定・行雲流水」、「たえざる自己批判」、「懺悔」等、大仏が愛好したキーワードがちりばめられ、まさに大仏空一代の思想を集約する文章と言える。

19一九四九年七月に投函されたと推定される「大仏晃雄宛書簡」は、昨年（二〇二三年）五月、増田さんが古い書簡を整理していて発見されたものである。茨城の願成寺を出奔して、別府の姉夫婦宅に居候していた一八歳の大仏が、カトリックの修道院に入る[5]という決意を率直に父親に伝えている。若き大仏は、それまでみずからが身を置いてきた仏教を「堕落しきった宗教」とみなし、「仏教の儀式」と「キリスト教の信仰」とを併せもった新たな宗教を創設するという野望を抱いていたのだが、現実のカトリック教会にその理想の形を見出した、という。カトリック聖職者の「熱烈な信仰と実行力」に対する絶大な信頼と相俟って、「遠永の御父に近づこう」とする熱い思いが伝わってくる。大仏は直後の一九四九年八月一五日に受洗するのだが、彼の信仰の基本的な方向性が、おそらくこの時点で定まったことは明白であろう。

註

(1)たとえば『ときわ路』の編集者吉田昇平によれば、大仏は晩年の一九八二年にも北陸や北関東の親鸞にまつわる旧跡を回っている（『ときわ路』九、一九八三年一月の「編集後記」を参照のこと）。

(2)おそらく、大仏の蔵書に含まれる岩本裕『仏教説話』（筑摩書房、一九六四年）や同『極楽と地獄――日本人の浄土思想』（三一新書、一九六五年）あたりの議論を下敷きにしていると思われる。

(3)13大仏空「インタビュー構成 おのれの地獄を見きわめよ――CP（脳性マヒ）者と生きて」（「大仏空著作集（二）」［『島根大学人間科学部紀要』六、二〇二三年］、五七頁）。

(4)晩年の大仏が増田レア氏に宛てた書簡にもピエテートへの言及がある（増田レア『無縁の地平に――大仏照子の生涯』［マハラバ文庫、二〇一五年］、一二〇頁：http:// maharababunko.private.coocan.jp/kaihouriron/sinnkaihou2.html）。

(5)大仏が修道院に入っていたことについては、自身でも触れている（前掲「大仏空著作集（二）」、三一、五四頁）。